

美馬文化 いななき

発行 美馬市文化協会

事務局 美馬市教育委員会 地域学習推進課

美馬市六吹町穴吹字九反地5番地 0883-52-8011

ふるさとの歴史と文学

幕末・維新の稲田猪尻侍 船山馨作『お登勢』とともに



小説『お登勢』（毎日新聞社刊一九六九年）で語られている「お登勢」とは、この歴史小説のヒロインの名前であり、時代の背景は、幕末・明治維新から明治初年のことである。

水仙郷で有名な論鶴羽山を

仰ぐ南淡路の村で生まれ、両親を亡くし、兄のもとで、幸い薄暮らしをしていたが、八〇石取りの洲本の徳島藩士加納家に奉公することになった。このとき、村から洲本への船中でお登勢は洲本稲田の勤王の志士津田 貢と出会い、好意を持つようになる。

ところで、洲本に稲田家が移り、淡路国の経営をするようになった経緯は次の様なものである。天正十三年（一五八五）、太閤秀吉の四国平定により、蜂須賀家政が播州龍野より阿波国一七万五千石の国主となり、配下の稲田植元は、阿波九城のひとつ、脇城に城番（城代）として入る。

慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣の戦功によって、翌元

和元年（一六一五）夏の陣後の五月二十日、伏見城で、二代將軍徳川秀忠から淡路国を拝領した藩主蜂須賀至鎮は阿波両国二五万七千石の支配者となる。このため寛永七年（一六三〇）、稲田家二代の示植が淡路への引越しを命じられ、由良城（のち洲本城）に入っている。脇城在城は、あしかけ四十六年であった。稲田家は、淡路国内と以前からの美馬郡一帯の給地を支配したが、洲本城代、また仕置で本藩の筆頭家老も兼ね務めた。幕末・維新の当主稲田植誠・邦植は蜂須賀家の直接の家来で本藩士であるが、その家来は又家来（陪臣）となる。このことは本藩士と稲田家士との動向に影響した。洲本城下では本藩士と稲田家士が軒を並べて住み、互いに競いあい、そねみあう状況があった。

一方、阿波国のこの地では、田舎の商業町である郷町脇町の傍らの猪尻村には、美馬郡一

帯の稲田家給地（幕末、約六千石）を管理・経営するための下屋敷（郷役所）、通称稲田屋敷があり、ここで諸業務に取り組む稲田家士は、猪尻侍と呼ばれ、徳島の本藩士、洲本の稲田の上級家士との狭間にあつて、剣術の錬磨を中心に、儒学・国学や兵学・兵術を学び、文武両道を兼備した戦士であった。幕末には尊王派の志士として、京都に出て各地の志士や岩倉具視らの公家とも交流した。

幕末の尊王攘夷・倒幕運動が激化する最中、幕府十一代將軍家斉の子供で、十三代阿波藩主となっていた蜂須賀斉裕は、当然幕府を支持しなくてはならなかったが、逆に朝廷もまた、

和元年（一六一五）夏の陣後の五月二十日、伏見城で、二代將軍徳川秀忠から淡路国を拝領した藩主蜂須賀至鎮は阿波両国二五万七千石の支配者となる。このため寛永七年（一六三〇）、稲田家二代の示植が淡路への引越しを命じられ、由良城（のち洲本城）に入っている。脇城在城は、あしかけ四十六年であった。稲田家は、淡路国内と以前からの美馬郡一帯の給地を支配したが、洲本城代、また仕置で本藩の筆頭家老も兼ね務めた。幕末・維新の当主稲田植誠・邦植は蜂須賀家の直接の家来で本藩士であるが、その家来は又家来（陪臣）となる。このことは本藩士と稲田家士との動向に影響した。洲本城下では本藩士と稲田家士が軒を並べて住み、互いに競いあい、そねみあう状況があった。

一方、阿波国のこの地では、田舎の商業町である郷町脇町の傍らの猪尻村には、美馬郡一



文政七年の「脇町絵図」 脇家蔵

帯の稲田家給地（幕末、約六千石）を管理・経営するための下屋敷（郷役所）、通称稲田屋敷があり、ここで諸業務に取り組む稲田家士は、猪尻侍と呼ばれ、徳島の本藩士、洲本の稲田の上級家士との狭間にあつて、剣術の錬磨を中心に、儒学・国学や兵学・兵術を学び、文武両道を兼備した戦士であった。幕末には尊王派の志士として、京都に出て各地の志士や岩倉具視らの公家とも交流した。

幕末の尊王攘夷・倒幕運動が激化する最中、幕府十一代將軍家斉の子供で、十三代阿波藩主となっていた蜂須賀斉裕は、当然幕府を支持しなくてはならなかったが、逆に朝廷もまた、

帯の稲田家給地（幕末、約六千石）を管理・経営するための下屋敷（郷役所）、通称稲田屋敷があり、ここで諸業務に取り組む稲田家士は、猪尻侍と呼ばれ、徳島の本藩士、洲本の稲田の上級家士との狭間にあつて、剣術の錬磨を中心に、儒学・国学や兵学・兵術を学び、文武両道を兼備した戦士であった。幕末には尊王派の志士として、京都に出て各地の志士や岩倉具視らの公家とも交流した。

幕末の尊王攘夷・倒幕運動が激化する最中、幕府十一代將軍家斉の子供で、十三代阿波藩主となっていた蜂須賀斉裕は、当然幕府を支持しなくてはならなかったが、逆に朝廷もまた、

帯の稲田家給地（幕末、約六千石）を管理・経営するための下屋敷（郷役所）、通称稲田屋敷があり、ここで諸業務に取り組む稲田家士は、猪尻侍と呼ばれ、徳島の本藩士、洲本の稲田の上級家士との狭間にあつて、剣術の錬磨を中心に、儒学・国学や兵学・兵術を学び、文武両道を兼備した戦士であった。幕末には尊王派の志士として、京都に出て各地の志士や岩倉具視らの公家とも交流した。

幕末の尊王攘夷・倒幕運動が激化する最中、幕府十一代將軍家斉の子供で、十三代阿波藩主となっていた蜂須賀斉裕は、当然幕府を支持しなくてはならなかったが、逆に朝廷もまた、

☆ふるさとの歴史と文学	1	●小星新四国霊場	8
☆文化協会会長挨拶	3	☆第16回 文化講演会	9
☆美馬市文化協会登録団体の活動	3	●演題「挑戦する心」	
●瑞穂流舞踊教室	3	☆懐かしい学び舎	10
●俳句ひまわり会	4	●宮内小学校（穴吹町）	
●徳島県薬草協会脇町支部	4	☆わたしたちのふるさと	11
☆伝統文化 三味線もちつき保存会	5	●江原北小学校	
☆第16回 美馬市文化祭	6	☆令和2年度 美馬市文化協会登録団体	12
●文化祭行事		●芸術作品展展示会	
●芸能発表		●協賛行事一覧	
☆身近な文化財	8	☆令和2年度4月現在 美馬市文化協会役員名簿	12
●旧 長岡家住宅	8	☆美馬市文化協会会報「いななき」編集委員	12
		☆編集後記	12

もくじ

大藩阿波藩を取り込もうと、御所の警備を命じ、嗣子の茂韶が京都に赴いている。また徳島藩としても、筆頭家老の稲田を介して尊王攘夷派勢力との関係も維持していく方策を取ろうとしていた。文久三年(一八六三)の八月十八日の政変により、尊王攘夷派から公武合体派が政治の主導権を握ると、徳島藩でも尊攘派は没落、公武合体を国是とするが、翌元治元年以降、猪尻侍の尊王派が京都に潜行して、軽々には動けない幕末の徳島藩を補完してゆく情勢があった。

この小説には、「舞中島」と題する一節があり、このころ本藩洲本付重役の尾関源左衛門の

お供で脇町に来ていたお登勢は、この地で津田 貢に再会、二人で眺めた吉野川と舞中島の描写があり、互いの愛が深まる。この部分の船山馨の描写は叙情的である。

慶応四年(明治元年)一八六八)一月三日、鳥羽伏見戦争が勃発、同日京都にいた稲田隊の工藤剛太郎に朝廷から厳重警備の勅命、十一日、竹澤寛三郎が東山道鎮撫総督軍先鋒として出発、美濃・飛騨(現在の岐阜県)に向かう。十二日、朝敵高松藩征討の勅命、二月十六日には、官軍東征大総督有栖川宮熾仁親王を親衛して江戸に向かう。維新回天では稲田家は大きな功績をあげている。

上の写真は、明治三年(一八七〇)五月十三日に、猪尻村の高札場に掲げられた旧徳島藩士が稲田猪尻侍を攻撃する、という予告の樹文である。その内容は、稲田家の家来が明治の御一新の政治体制に従わず、徳島藩知事(蜂須賀茂韶)や朝廷政府の調停にも従わず、稲田家の分藩独立を強固に主張するのは、知事を蔑にし旧主(稲田邦植)をも不義不忠とする天地に容れざる大悪であるので、阿淡の旧徳島藩士一同決議の上、これを企てた稲田の主謀者の罪を罰し攻め伐ち、知事の恥辱を清め、人々の憤りを解消するので、そのような姦徒に味方せず、あとで後悔しないように申し聞かせておく、とある。

谷家文書(徳島県立文書館蔵)
稲田猪尻侍歴史資料館 展示

明治三年(一八七〇)、前年の版籍奉還と禄制改革により、陪臣の稲田家臣は「士族」ではなく「卒」となり、一律年額九石五斗と郷付従卒となるとい、生活も困難な不利益を蒙ることになる。この際稲田藩として分藩独立したいとの強固な要求をした。激怒した若い徳島藩士が、五月十三日早朝、洲本で稲田家士の殺傷事件、庚午事変を起こした。この事変では徳島藩兵隊が猪尻の稲田屋敷の襲撃に向かっていた。この時の猪尻侍の行動は、この小説「稲田騒動」の一節で語られている。「たとえ仕掛けられた戦いであってもそれを受ければ私闘であるし、私闘となれば、彼れも我も等しく罰せられるのは当然である。稲田のお家に傷をつけることになる」と拜村吉左衛門は言い、「私に武器を取って争うのは、無名の暴力だ。そういう時代は御一新でもう終わっているのだ。争うことがあればこれからはただ法と言論によらねばならぬ」と前田安左衛門は説いた。その結果、ひとまず全員が美馬郡を立ち退いて、高松藩領へ難を避けることに衆議一致した。

庚午事変の後、稲田家臣団は北海道日高国静内郡(現新ひだか町)に開拓移住をすることに。そのうち明治四年(一八七二)八月二十三日に洲本を出帆した第四船平運丸には二一七人の移住者が乗船、乗船者は阿波からの移住者が多かった。同日夕刻、和歌山県西牟婁郡周参見(現すさみ町)湾口の暗礁に接触して沈没、八十三人が亡くなった。船員三名も溺死、船長は割腹自決しているが、溺死者へのお詫びよりも、「薩摩の藩船を沈めた責任を取る」と作者は書く。歴史感覚は鋭い。

幸いにもお登勢と預かった兄の子仙吉は助かり、大坂から品川、函館と船を乗り継ぎ、先行の夫津田 貢の待つ静内に至り、困難な開拓に挑む。アイヌの人々の助けも借りながら開拓はすすむが、お登勢は、野馬を調教して農耕に使うことを考え、馬を御するの、堪能なアイヌのイソカヤン(人名)の手を借りてそれを実現してゆく。一人の女性の、北海道の大地とたたかつての自立であり、それは吉永小百合さん企画主演の『北の零年』の映像につながる。

船山馨のこの小説は歴史

事実を正確に伝えており、それを縦糸にして、人々の愛やよるこび、労苦と悲しみ、生きぬくためのたたかいを表現しており、いわば歴史を全身で体験できるような作品である。また私たちの郷土を素材にしてくれている。良質の歴史小説に接して、「文学」と「歴史」の両側から時代を探ることもできるのではないかと想う。

船山馨は大正三年(一九一四)生まれ、実父は余市生まれという。稲田家臣の仁木竹吉の開いた仁木村も余市にある。また剣道の達人でもあり、仁木の伝承と稲田家臣に寄せる愛惜も強かったのかも知れない。『お登勢』の作品は骨格がしっかりしている。精緻な史資料調査とその記述は正確である。

ともすれば歴史家の歴史叙述というものは、時間的な歴史の流れと事実の羅列、その筋道を教えることに終始しがちであるが、文学には人の心、愛、労苦、よろこび、悲しみ、人の命の息吹が表現される。歴史と文学を合わせ読み、難解になりがちな現今の歴史叙述を理解する端緒にもなると想われる。

文化協会会長 挨拶



美馬市文化協会 会長
小林 一郎

第十六回美馬市文化祭、恙なく終了することができほっと一息ついたところで、会報十六号発刊にあたりご挨拶申し上げます。

本年の開催は例年と異なり、悩む事が多くあった。新型コロナウイルスである。世界中に蔓延している中での開催をどうするか。徳島県の感染症状況をみながら開催に踏み切った。

開会式に先立ち、オープニングとしてヴォルティスコンデিশヨニングによるプロگرام紹介、舞台上で健康体操、次いで開会式にうつった。

式終了後、美馬市十五周年功労者表彰で午前は終わる。午後は文化講演会・教育振興大会、青少年健全育成市民会議・PTA連合会・教育委員会と共

に、シドニー五輪百kg超級銀メダリスト、今はバラエティー番組、情報番組等に出演し多忙な日々を送られている、柔道家篠原信一氏による「挑戦する心」と題して講演いただいた。青少年向けで盛況であった。開会式は例年ほどの派手さはなかったがまずは成功裏に終わることができた。

芸術作品の展示発表は、昨年と同様、図書館内を含む地域交流センター(ミライズ)全館に設け、文化協会会員の力作を展示し来場者に楽しんでもらった。

本年、新型コロナウイルスの關係で文化研修旅行は中止、またミライズでの芸能発表も中止、代わりに市内施設数カ所を選定し、文化研修スタンプラリーを実施した。協会会員の皆にも楽しんでもらえたと自負している。

このウイルス問題が解決し終息しない限り、今後色々な対策を考えながら事業を進めて行かなければならないであろう。最後になりましたが、お世話



になった関係者の皆様にお礼を申し上げます。

文化協会登録団体の活動

代表 田中 久也

私達の瑞穂流舞踊教室は、馬町時代から美馬町民舞踊教室として、平成十三年七月から活動してまいりました。平成二十九年に改名し、会の名に恥じぬよう心新たに会員共々お稽古に励んでおります。

日本舞踊には民舞、新舞踊、邦楽の分野がございます。踊ることによって全身を動かし頭脳を働かせ、手足を使い踊る楽しさは、素晴らしい日本の伝統芸能だと思います。この伝統ある日本芸能を、子ども達をはじめ老若男女を問わず皆様方に日本舞踊の奥の深さ、楽しさを多くの方々に味わっていただ



き守り伝えて頂きたいと痛切に感じます。

昨今、社会現象と共に日本舞踊の影が薄らいでいるかのよう感じられます。今一度日本の伝統芸能である日本舞踊に目を向けて頂きたいものです。踊る楽しさを私達と一緒に楽しみましょう。入会をお待ちしております。

稽古は、代表者自宅、ミライズ交流センター(カルチャー教室)で行っております。活動としては、市文化祭への参加、各

種イベントへの参加をさせて頂いております。また瑞穂流派の発表会と新舞踊の発表会を県下各教室からご参加いただきましてミライズにて年一回盛大に開催しております。

再度申し上げますが、日本の伝統芸能である日本舞踊を後世に守り伝え継承していくことが私達の使命と思っております。微力な私達ではございますが日々努力精進して参りますが今後共よろしく願いいたします。

「俳句ひまわり会」は十五年ほど前に、徳島市に本拠を置く結社「ひまわり」から分かれて活動をしております。

そもそも「俳句」は室町時代に流行した連歌の遊戯性、庶民性を文芸に高めたものが俳諧で、十七世紀に松尾芭蕉が出てその芸術性を高めました。中でも、単独でも鑑賞に堪える自立性の高い発句、すなわち発句を数多く詠んだ事が、後世の俳句の源流となったと言われております。季語や季感を持たない無季俳句や、定型からの自由を旨指す自由律俳句もあります。私達は季語を大切にしたい



勉強会の会場は教育委員会の許可を得て、猪尻公民館の一室を約二時間お借りして、現在五人の会員が句作に励んでいます。以前は十人を超える在籍

五七五調を基本としています。日常生活の中での些細な出来事や感じたこと、季節の移ろいや世間の出来事、人生の喜びや悲しみを題材にして、現代口語で詠んでいます。

ときどき川柳のような句も出てくる場合がありますが、ご愛敬のひとつとして会員同士のコミュニケーションのひとつになつていくようです。講師・先生・師匠は招聘せず会員の互評に終始しています。従つて句作の腕はいまひとつ低迷していると言つたところでしょうか。



者がおりましたが、亡くなられたり高齢になり退会されたりで、今後の活動も危ぶまれる状態です。

現在全国には八百から千の俳句結社があるといわれておりますが、私たちは結社とまでは成長していませんが、日本語独特の文字と形式から生まれる世界最短の定型詩を大切に維持しながら、句作に励みたいと思っております。

本事業は毎年十月末の土、日曜日に計画し場所は河野メリクローンで実施しております。

木苗の無料配布や会員が栽培した野草、菊の花等を格安で販売しました。

葉の生い立ちは、薬草の発見に始まり、古代の人々の生活の中で試され長い年月の尊い経験によつて発達し、伝えられてきました。現在の薬は科学的に合成された医薬品と天然の植物や動物から作られた生薬が使われています。薬草を利用するにはしっかりとした知識を持つて使用しないと薬になるどころか、中毒を起し大変なことになるので注意が必要です。

さて、徳島県薬草協会脇町支部の規約で「薬草の正しい知識の習得と普及に努め県民の健康保持に寄与すること」と明記しています。徳島県薬草協会は結成五十年間活動を行ってきた実績があります。脇町支部は結成十九年となり活動の一部を紹介いたします。美馬市文化祭の協賛事業として参加させていただいております。身近な薬草展の事業内容として、薬草木の展示、ドクダミ茶、甘茶、ドクダミジュースの試飲、そして薬草苗の無料配布や会員が栽培した野草、菊の花等を格安で販売しました。

が、本年度はJA美馬のふれあいセンターで実施しました。

支部単独事業として美馬市交流促進宿泊施設美村が丘に併設された薬草園の管理作業を行つていきます。また、日帰り先進地視察研修旅行や近隣山野へ薬草調査採集などをしていきます。仲良く、楽しく、健康をスローガンとしています。本部、他支部各種団体事業の呼び掛けにも参加しています。



伝統文化

美馬市無形民俗文化財

「三味線もちつき」について

江戸時代、脇町が阿波藍で栄えた頃、豪商達が年の暮れに芸者に三味線をひかせ、唄を歌わせ、カネ、太鼓などの鳴り物にあわせて、にぎやかに正月用のもちをつかせたのが始まりと言われています。

昭和四十七年に旧脇町が無形民俗文化財に指定し、美馬市となった現在も官公庁仕事納めの日に、美馬市役所前で一般公開をして保存に努めています。

「三味線もちつき」は、景気の良いもちつき唄を、三味線、太鼓に合わせて歌いながらつく、めでたいもちつきです。クライマックスに見せる杵取りとつき手の絶妙なタイミングとスピード感は、見るものを惹きつけます。また、もちつき唄は当地のことを唄っており郷土色豊かなものです。

市内外の公共施設や福祉施設などの行事、祝い事、物産展など多くの催しにも参加しており、子どもからお年寄りまで多くの人に喜ばれています。つきたてのおもちを皆さんに食べていただけるのも魅力のひとつです。

現在、三味線もちつきは「きたざき組」、「井内組」、「うだつ」の三組によって行われており、伝統文化の保存継承と発展に力を注いでいます。



「きたざき組」
代表 北崎 栄一

私達きたざき組は全国物産展・中国四国ブロック物産展のイベントとして招聘され、各地の皆様と交流を図りながら三味線もちつきを通して、新たに斬新なパフォーマンスを披露して参りました。

また高齢者施設に於いては、入所者の皆様と和気あいあいの中で伝統芸能の普及に務めております。二〇二〇年は、新型コロナウイルス感染症という状況なので、活動は自粛しておりますが、皆様

とともに三味線もちつきを楽しめるよう願っております。これからも皆様と元気を与え、勇気を与えることができま

すよう会員一丸となって微力ではありますが、三味線もちつきを次世代に引き継ぐことができま



「井内組」
代表 井内 春行

美馬市指定無形民俗文化財・指定第一号として、脇町三味線もちつき保存会・元祖「井内組」は結成されました。江戸時代より始まった三味線もちつきですが、戦時中は中断していました。先代の井内行衛さん

が戦後再び三味線もちつきに意を燃やし、今日に至っています。私達は市内の各イベントは勿論のこと、これまで北海道砂川市との交流や、東京六本木ヒルズ、福岡県大牟田市等々の主要都市でも活躍してまいりました。

今年にはコロナ禍に

今年にはコロナ禍に



「うだつ」
代表 香西 俊幸

「我が町にこんな素晴らしい三味線もちつきがあったことを知らなかった。」と子供達が興味を示し、学習を始めて十三年を迎えています。高齢化が進む中、次世代に貴重な財産である三味線もちつきを正確に将来にわたり、

継承発展してもらいたいとの思いから文化庁伝統文化親子教室の認定を受け育成に取組んでいます。子供達が多くの子供達と習得をとおして歴史、伝統文化に対する関心や理解を深め尊重する態度を育て豊かな人間性を養

ってほしいとの趣旨に賛同する者達の集りが「うだつ」会員一同です。三十人体制での日々切磋琢磨しながら頑張っています。

現在新型コロナウイルスの影響で活動休止の状態ですが、人権教育啓発推進セ

我が町の三味線もちつきは将来継承が明るく楽しみです。

第16回 美馬市文化祭

令和2年11月14日(土) 美馬市地域交流センター「ミライズ」

開会行事 令和2年11月14日(土)



11月14日(土)

16回 美馬市 文化祭

伝統を受け継ぎ 令和へ未来へ 文化のつぎを

美馬市地域交流センター ミライズ

開会行事 市民ホール

10:00~14:00 13:00~14:30

15:00~18:30

11/14 10:00~20:00

芸術作品等展示会 令和2年11月14日(土)~20日(金)

出品した作品

No.	団体名
1	穴吹ビデオ教室
2	写真クラブ目
3	木屋平カメラクラブ
4	水墨画美馬教室
5	夢あそび
6	拝原墨絵教室
7	美馬市盆栽趣味の会
8	美馬和傘製作集団
9	穴吹陶芸教室
10	細川流盆石 脇町子ども盆石教室
11	なでしこ
12	俳句ひまわり会
13	穴吹籐工芸

No.	団体名
14	美馬市連合婦人会
15	美馬里工房
16	徳島県シルバー-大学校美馬校OB会連合会
17	日中友好協議会
18	線美会
19	美馬町趣味の会 書道部会
20	脇町漢詩教室
21	キルトサークル『どんぐり』
22	脇町税務署
23	美馬市消防本部
24	美馬市内小学校
25	美馬市内中学校

